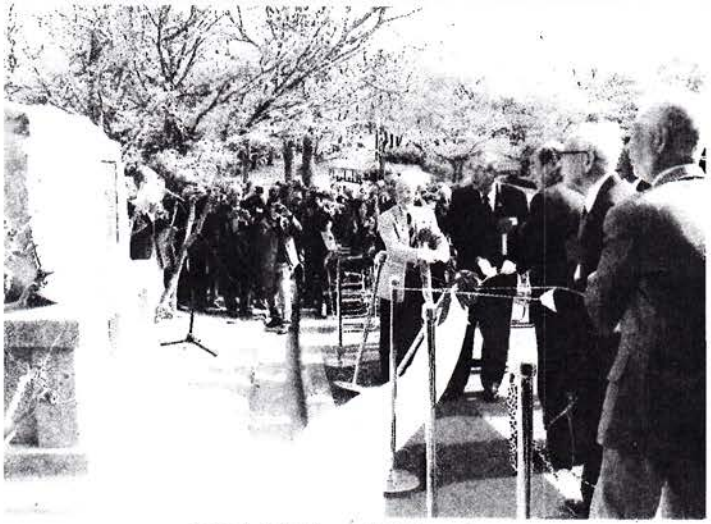
緑爽会報　NO.117
'13年　4月20日
発　行
公益社団法人
日本山岳会　緑爽会
☎ 03-3261-4433
事務局　松本恒廣
夏原寿一　近藤雅幸
近藤　緑　川口章子
横山　隆　渡部温子

―緑爽会総会のお知らせ―

日時　5月16日（木）午後13時半～
（昼食の用意はありません）
場所　日本山岳会会議室
議題　2012年度事業報告・決算報告
2013年度事業計画案・予算案
その他

終了後、関塚貞亨会員による講演「大正2年夏　上高地」を予定しております。
同封の葉書で出欠をお知らせください。

事務局


小島烏水碑除幕式　高松市峰山公園にて

◆第1回小島烏水祭盛会のうちに終る

昨年誕生した四国支部が準備していた小島烏水の顕彰碑が生地高松に完成し、4月14日(日)に、除幕式が挙行された。尾野益大支部長が緑爽会々員ということもあって、百名を超える参加者のうちには仲間の顔も多く、それぞれの支部を代表して碑前に献花をした。市民の集まる峰山公園「はにわっ子広場」の一隅、子どもの声が響いてここなら烏水碑も淋しくないだろう。（参加会員　田村佐喜子・近藤緑・里見清子・平野紀子・鳥橋祥子・川口章子）

写真上　除幕式　坂東明文（四国支部）、他は小泉義彦撮影

芦安への途次、展望台から甲府盆地を望む

いろいろなことを想いつつ
南アルプス芦安山岳館見学と昼食会

この計画は当初、新年会をかねて1月に実施する予定だったのが、大雪のために延びてしまい、幹事のお二人にはご苦労をおかけした。そして迎えた4月11日（木）には、桃も桜も盛りを過ぎていて、春爛漫の甲府盆地とは言えない景観。それでも誰一人不満を口にしなかったのは、仲間としての思いやりだったろう。花の時期ほど読めないものはない。

現事務局体制に代った10年前の甲州路のお花見はまさに満開の時だった。緑爽会報にその報告を書いた小倉厚さん、記念写真の中央に座った村山雅美さん小原晴子さん、そのほか何人かの人はもうこの世にはいない。

このたびの旅の発端となったのは、宮澤美渚子さんのお連れ合いである故宮澤憲さんが遺した1本のピッケル。1948年北岳バットレス中央稜の登頂をしたのは松濤明と言われてきたが、憲さんの著書『ヒマラヤ一つの峰の物語』を読むと、末端からの初登攀は彼の援けがなくては成功しなかったことがわかる。同行者が松濤と同じ徒歩渓流会々員でない場合にはイニシャルでしか記されていない。Mが誰であるかは不明なままで、翌年1月には北鎌尾根で松濤明が遭難。死後『風雪のビバーク』が出版され、彼の遺書が世に紹介された。「サイゴマデ　タタカフモイノチ　友ノ辺ニシスルモイノチ　共ニユク（松ナミ）」などの記述が読者の胸を打ったものだ。

しかし、憲さんは「これを読んだとき有本（注・同行者）の遺族がどう思うか」と懐疑的だ。同じとき猛吹雪の天狗尾根で仲間と死闘していた経験から一人で下れるわけがないというのだ。中央稜バットレス下部の困難な場所を援けてもらいながら、同行者を無視した松濤明は偶像化されて登山史に残り、同行者については人に聞かれても「あの貧乏野郎か」と言っただけだったという話に、松濤の若気とライバル意識とが感じられる。

昨年6月、芦安山岳館が「南アルプスの登山史を探る」を企画していることを知って、塩澤久仙館長にこの本を送ったところ、憲さんの無念を思って涙が出たそうだ。すぐに文献を調べて山崎安治編纂の『日本登山記録大成』に宮澤憲の名前があり、当日、雪渓を登るのにピッケルを持っていったことも判って、急遽、遺品のピッケルが展示されることになった。憲さんの一周忌に、北岳山麓の芦安山岳館に遺品が納められたのは幸いなことだった。今回、闘病中の美渚子夫人が参加できなかったのは残念だったが、塩澤館長のお話をはじめ、地元の白雲荘のお料理、芦安観光のドライバーの親切には一同大喜び。また飛入りで立山博物館学芸員の吉井さんが参加してくださったのも嬉しかった。（近藤　緑）

［参加者］山本良子・田村佐喜子・松本恒廣・近藤緑・横山隆・鳥橋祥子・中澤喜久郎・島田稔・田井具世・川口章子・中尾千予光・小泉義彦・西谷隆亘・西谷可江・中村好志恵／布川欣一・三枝海枝・吉井亮一　係　里見清子・渡部温子　計20名

山岳館情報コーナーで塩沢館長のお話を聞く

私の山スキーのこと

芳賀 孝郎

私は北海道での深雪スキーを頭に描いて、2011年8月札幌へ移転をした。待望のスキーシーズンがやってきた。古い山仲間と共に、深雪のラッセルしながらのスキー登山が始まった。私のスキー道具は全て長く愛用した古い道具である。

仲間は急斜面を楽に登って行く。ところで私はそうはいかないのである。その差はシールにあることが判った。彼らはスキーの滑走面の全面に合わせたシールを使用していた。スキー金具も斜面に合わせて、靴のかかとの高さをアジャストする仕掛けがついていた。これで登高が効率的になり、体力の消耗が少なくなることも解かった。寒さもマイナス17度に風があるので厳しく感じる。ヒマラヤで使用した古い目出帽にゴーグルを付け、オーバー手袋でも寒さを感じた。

寒風をついて頑張る芳賀さん

私は山スキーグループの中の一員であるから、仲間のスキー道具の性能の良さを横目で見ながら仲間に迷惑をかけないよう、やせ我慢のラッセル交代をした。

ゴンドラを降りてから2時間余りの登りで山頂に立った。シールをはずして、いざ行こう、膝までの深雪にシュプールを描きながらの滑降が始まった。

斜面と雪との対話をしながら、林間をくぐり抜けるコースを楽しむ滑走である。これぞ山スキーの醍醐味、と思う間もなく大きく転倒した。転倒すると雪が深く、私の体力では一人で立ち上がることは出来ない。雪の中で溺れてしまいそうであった。

仲間に助けられてようやく立ち上がった。自分の情けなさを感じた。外れた金具をつけようとした時、靴のかかとが剥がれていることに気づいた。スキー靴が劣化していた。

転倒してからの滑降は、再度転倒しないよう格好悪い西洋便所スタイルでゆっくりと回転しながら無事滑り降りた。

仲間から「あなたのスキー道具は古く、劣化しているので全て新製品に切換えるべき」との指摘を受けた。お蔭で最新のスキー靴、スキー金具、幅に合せたシール、深雪用のポールに帽子、手袋等を購入した。更に私のスキー術はクラシックとのこと、最新の山スキー術はDVDを購入して研究することもすすめられた。これから山スキーをするならば雪崩講習会とビーコン使用の実施訓練にも参加するようにとのアドバイスも受けた。

今回の山スキーのことで反省するところが多々あった。スキー道具は劣化したので新しい道具になったものの、新しい道具を使用する本人が劣化しているのに気が付いた。劣化した体力で古典的スキー術から抜け出すことができるのか……！

札幌に戻り深雪スキーを楽しむには遅すぎたかなー、と感じる今日この頃である。

2013年3月記

さようなら松尾美貴子さん

国見 利夫

突然の訃報に驚きました。まだ60歳代に入ったばかりの筈。

緑爽会ができてからの山仲間ですから、20年足らずの山仲間ですが、私の最晩年の、“かみしめるよう”な山歩きを共にした友人なので特に印象深い仲間です。志賀高原・蓼科高原・要害山・甲斐大泉などの1泊2日のゆっくりした山行が多く、日帰り登山にない、ゆっくりとした対話のある山行の仲間でした。

夜の小屋での、おしゃべり会では常に末席にひかえ、翌日の山頂記念写真では常に端に立っていた。比較的高年齢会員の多い緑爽会の中では若年に属していたからかも知れないが、生来ひかえめで、めだたない、童女の面影をもった人だった。

80歳代の私にとっての最晩年の20年の山行が、40～50歳代のあなたにとっても最晩年の山行になってしまったことは悔しい限りです。

平成22年の年次晩餐会で私は永年会員賞を受けることになったが、平成17年から闘病生活に入っていて外出はしていなかったが“ならば出席してみるか”と金井一子、渡部温子両会員につぶやいたから、それからが大変。家族の車で品川プリンスへ出かけましたが、宴会出席中家族の対応にこの金井、渡部両会員が晩餐会を欠席してホテルロビーで当たることになり、私の宴会場での面倒は松尾さんが担当してくれることになった。この時初めて松尾さんが看護師さんであることを知った。

松尾さんは「ユックリ」「ユックリ」と小声で号令をかけながら私を指定の席に案内してくれた。席は主賓席で皇太子の富士山テーブルの隣の槍ヶ岳テーブル。背中合せの大峰山テーブルに松尾さんの席が定められていた。松尾さんにすれば年に一度の山岳会晩餐会。同年代の山仲間とゆっくり山の話を交しながら晩餐の時を過ごす筈だったのに、この上段のテーブルは会の幹部と元老ばかり、言葉を交す相手もなく、もっぱら私の体調を気づかいながらの晩餐会となってしまいました。

やはり病中の宴会は負担が大きく、松尾さんの決断で途中退席となり、私は家族に引き渡されましたが、あわただしい中での別れで充分お礼の言葉もかけられずに終わってしまい、今日に至ってしまいました。

最後まで松尾さんにはお世話をかけましたね。ひそやかに、小さく輝く星が静かに消えた。そんな感慨で胸が一杯です。

松尾さん、ありがとう。そしてさようなら。

（松尾美貴子さんは1月27日に逝去されました。享年60歳。謹んでご冥福を祈ります。）

編集後記★前号3頁の「松方三郎氏のご尊父の幸次郎氏」とあるのは兄上の間違いでした。訂正してお詫びします。★では総会でお会いしましょう。（近藤）

平成22年 年次晩餐会での筆者（中央）と松尾さん（右端）